

## リヨンのシルク市に富岡市（群馬県）が出席

毎年、秋にリヨン市で行われるシルク市（Le Marché des Soie）が今年も、2009年11月26日（木）～29日（日）にかけてリヨン市商工会議所で開催されました。このシルク市はフランス絹産業協会<sup>1</sup>が主催するフランス唯一のシルクマーケットであり、通常購入できない最新のデザインや素材をあしらったモスリン、ベルベット、サテンなどの絹生地や絹製品が一堂に集まるこのシルク市に毎年多くの客が来場します。

2008年に続き2009年も、富岡市が本シルク市に出展しました。リヨンに拠点を置くシルク製品の卸や小売業者が本シルク市に出展する中、富岡市とリヨンは「絹」をつながりとして歴史的な縁<sup>2</sup>があったことから富岡市は海外からの唯一の出展者として参加しました。富岡市は現在、シルクの生産のみ行っており、生地の製作やシルク製品の製造の拠点は群馬の桐生市などほかの地域で行っていますが、現在、富岡市は群馬県と連携し富岡のシルクを使った製品を「富岡シルク」としてブランド確立に取り組んでいます。



歴史的に絹産業が盛んなリヨン市（赤○）。16世紀には、当時のフランス国王から、リヨンは独占的な絹の輸入貿易の地位を与えられるなど、それ以来、フランスの絹産業の中心地である。

普段手に入らない絹の生地や製品が購入できるということで客足は絶えず、会場はお客でにぎわいました。昨年度は富岡シルクの見本の展示だけでしたが、今回は、地元出展業者が売っている絹製品と競合しないものに限り製品販売が主催者から認められたことから、会場で実際に富岡シルク製品の販売が行われました。地元出展企業の取り扱っているシルク製品はシルクの生地や糸、ハンカチやスカーフなどですが、富岡市が販売したのは美容のシルク・ミトンやスキンメイクブラシ、保温・防寒用の靴下や腕や足のカバーなどでし

<sup>1</sup>正式名称は Association Française Interprofessionnelle de la Soie。別名 Inter Soie France と呼ばれています。

<sup>2</sup> 富岡市とリヨン市は、19世紀に蚕の病気が欧州で蔓延し絹の生産が一時的に困難になった時、蚕の疫病対策が進んでいた日本から絹が欧州に輸出され、当時、絹生産の官営模範工場であった富岡製糸場で生産された絹糸がリヨンの絹製品に使用されたり、富岡製糸場の建設にあたったフランス人技師ポール・ブリューナは来日前に絹産業が盛んなリヨンで活躍していたなどのつながりがある。

た。また、販売はしませんでした。シルクを使ったサブレや飴などフランスではシルクを使って商品化しないような製品がお客様の関心を呼びました。その結果、日本からの輸送費用がかかり販売価格は日本の売値よりかなり割高だったにもかかわらず、用意した商品の在庫の半分くらいは売れるなど、上々の成果でした。非売品のスカーフを欲しいのでインターネットで購入はできるのかというような質問するお客もおり、ネット販売の拡充も重要になりそうです。また、富岡市は、本シルク市出展期間中に、個別に本見本市の現地出展企業の一つへ富岡のシルク売り込みの交渉を行っていました。

富岡市はリヨン市との絹を通した歴史的なつながり・交流を活かし、富岡シルクの紹介と海外販路拡大へ今後も一層力を注いでいくこととしています。

2009年12月1日  
クレアパリ事務所  
所長補佐 安藤洋行（静岡県派遣）



シルク市の会場となったリヨン市商工会議所全体の様子



富岡市のブース



現地企業出展ブースの様子